

詩編 115 : 1

ローマの信徒への手紙 11 : 36

「神にのみ栄光あれ」

(ハイデルベルク信仰問答 祈りについて 問 128)

※信仰問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】 詩編 68 : 20～21

【讚美歌】 2 5 「父、子、聖霊に」

【詩編交読】 詩編 3 2 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 2 9 7 「栄えの主イエスの」

【祈祷】

【聖書】 詩編 115 : 1

ローマの信徒への手紙 11 : 36

【説教】 「神にのみ栄光あれ」

<教会の言葉>

主の日の礼拝では『ハイデルベルク信仰問答』をもとに「主の祈り」の言葉を一つずつ、御言葉から紐解いてきました。

今日は、「主の祈り」の最後の言葉、「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」、というところです。

「なんじのものなればなり」というのは、だいぶ古い言葉遣いですが、今の言葉に直したものは、「国と、力と、栄光は、永遠にあなたのものです」となっています。

主の祈りは、こうして、天の父なる神さまをほめたたえる言葉で終わるのです。

しかし、実はこの言葉は、イエスさまが教えてくださった祈りの中には含まれていませんでした。教会が祈っている「主の祈り」は、新約聖書の「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」に残されている言葉から祈られています。しかし、この最後の神さまをほめたたえる言葉は、福音書の中にはなく、「主の祈り」が祈られていく歴史の中で、後から教会が付け加えるようになったものだと言われています。

「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」。この、神さまへの賛美は、「主の祈り」を祈り続ける中で、教会の祈る者たちの心の中から、信仰の中から、溢れ出してきた言葉なのです。

<まことの神さまへの信仰によって祈る>

さて、これまで、「主の祈り」の内容は、前半の3つと、後半の3つの祈りで構成されている、ということをお教えされてきました。

前半の3つは、「み名をあげさせたまえ」、「み国を来らせたまえ」、「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」という祈りで、神さまがまことの神であられるゆえに、その救いの御力を現わし、支配してくださり、御心を実現してください、と祈りました。

そして、後半の3つは、「われらの日用の糧を今日も与えたまえ」、「われらに罪をおかす者を、われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」、「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」という祈りでした。これらは、わたしたちが天の父なる神さまだけを、まことの神として依り頼み、神さまから離れることがないように、守り、導き、救ってください、という祈りです。

このように、「主の祈り」は、天におられる神さまを見上げ、その御力、ご支配、御心を見つめるところから始まって。低き地上にあるわたしたちが、心を天へと向けさせられて、ますます神さまに自分を委ねていくこと。ますます神さまと共にあって、神さまを愛し、神さまへと近づいていくことを、願い求める祈りなのです。

そして、この祈りを、「天におられるわたしたちの父なる神さま」にこそ向かって、祈ることが出来るのは。神さまが、真実にまことの神であられ、それを成し遂げてくださる力をお持ちであり、しかも、そうすることをご自身が望んで下さっているからなのです。

「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」。この、「なればなり」というのは、「なぜなら、こうだからです」というような、理由や根拠を現わす言葉です。

つまり、この最後の言葉は、「これらの『主の祈り』を、わたしたちの父なる神である、あなたにこそ向かって祈るのは、祈る相手であるあなたが、国と、力と、栄えを、永遠にお持ちの方だからです。あなたこそ、まことの神だからです。祈りが聞かれる確かな根拠は、すべてあなたにあるからです」と、神さまへの信仰を告白しているとも言えるのです。

今日の間 128 の答えの前半には、こうありました。

「問 128 あなたはこの祈りを、どのように結びますか。」

「答 『国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり』というようにです。すなわち、わたしたちがこれらすべてのことをあなたに願うのは、あなたこそわたしたちの王、またすべてのことに力ある方として、すべての良きものをわたしたちに与えようと欲し、またそれがおできになるから」です、と。

[国]

ここに出てくる、国というのは、神さまのご支配のことです。問答の答えには、「あなたこそわたしたちの王」とあります。神さまが、天も地も、見えるものも見えないものも、命も死も、すべてをご支配しておられる、すべての王なるお方である、ということです。

罪や、死や、悪が、わたしたちを支配する王なのではありません。わたしたちは、神さまが王であられる、神さまの御国で、神さまのご支配の中に生きる者なのです。

[ちから]

そして、ちから、というのは、神さまの全能の御力のことです。

神さまには、どんなことも実現することがお出来になる力があります。でもそれは、わたしたちの願いを何でも叶えることがお出来になる力、という意味ではありません。

神さまが、その御力を発揮されるのは、わたしたちを愛してくださること、救ってくださることにおいてです。

わたしたちを愛し抜くためなら、何でもお出来になる力。わたしたちを救うためなら、何でもお出来になる力。それが、神さまの全能の力です。

ですから、天の父なる神さまは、お造りになったわたしたちが、どんなに背いても。どんなに逆らっても。どんなに罪を犯しても。それでもわたしたちを、愛し抜いてくださることがお出来になります。

しかも、父なる神さまは、わたしたちを罪から救い出し、また神さまと共に生きる者とするためなら。ご自分の独り子であるイエスさまに、わたしたちの罪を背負わせてくださることまでお出来になる。そして、神の御子イエスさまは、その御心に従って、わたしたちの救いのためなら、苦しみを受け、十字架に架かり、ご自分の命を犠牲にすることまで、お出来になるのです。

神さまは、すべての力をかけて、わたしたちをそこまで愛し抜いて下さるのです。

そして、死ぬ者を、生きる者とし、罪人のわたしたちを、神の子としてくださることがお出来になる。そのような力をお持ちなのです。

信仰問答では、このようなお方が、「すべての良きものをわたしたちに与えようと欲し、またそれがおできになるから」、わたしたちは、これらすべてのことを、神さまに願うことができるのだ、と語っています。

すべての支配者であり、王である神さまは、その全能の愛の御力で、わたしたちに「すべての良きもの」を与えようとしておられます。

そのような方が、「わたしたちの父なる神」でいて下さる。こんなに幸いなことはない。こんなに心強いことはないのです。

[栄光]

ですから、問 128 の後半には、こうあります。「そうして、わたしたちではなく、あなたの聖なる御名が、永遠に賛美されるためなのです」。

この救いの恵みのゆえに、この全能の御力のゆえに、わたしたちは、すべての栄光が、ただ神さまにのみ、永遠にありますようにと、祈ることができるのです。

このゆえに、わたしたちは、神さまにすべての栄光を帰し、ただ神さまだけに栄光があることを認め、神さまをほめたたえるに至るのです。

ここで、覚えておかなければならないのは、わたしたちが、「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」と唱えるとき。それは同時に、神さまの御前で、わたしたちには、国も、ちからも、栄えも、一切ありません、ということ、へりくだって、受け入れ、認めるということです。

良きものすべての源は、祝福は、ただ神さまにこそあり。わたしたちは無力で、弱く、罪深く、自分では、ほんの一時立っていることさえ出来ない者です。日々、イエスさまの十字架の血によって、罪の赦しをいただかなければならない者です。

そして本来、罪人であるわたしたちは、神さまを目の前にして、その栄光を目の当たりにするなら、そのあまりの輝きに、御力の強さに、すぐに滅びてしまう存在でした。

旧約聖書では、「栄光」という言葉は、神さまのご臨在と、その御力の輝きを現わします。ですから罪深い人間は、神さまの御前に出れば、死んでしまうと言われていたのです。

出エジプト記には、こんな神さまの御言葉があります。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」(33:20)。

しかし、神さまは、背き、逆らい、御前に出られなくなったわたしたちを、それでも愛し続けて下さいました。

そして、そのようなわたしたちの罪を赦して、聖なるものとし、ご自分と共に生きる者とするために、ご自分の御子イエスさまを、わたしたちの許に、この暗闇の世に、お遣わしくくださったのです。

神の御子イエスさまは、この世の、わたしたち罪人のところへ、弱い者のところへ、小さい者のところへ、暗闇の中にいる者のところにまで、低く降りて来られました。

そして、このまことの人となられたイエスさまにおいて輝く、神さまの栄光は、わたしたちの罪を暴いて撃ち倒す光ではなく。暗闇の中で輝いて、わたしたちと共にあり、道を照らし、慰めを与え、心を癒し、導いてくださる、そのような神の光だったのです。

そして、神さまの栄光は、救いの御力は、あの惨めで、苦しみに満ちた、十字架の上で、最も輝きました。十字架の上の、ボロボロになられたイエスさまにおいてこそ、わたしたちの罪と死をうち滅ぼす光が、神さまのご栄光が、最も力強く輝いたのです。

そしてイエスさまは、死んで、葬られ、とうとう陰府にまで、降られたのです。

そのゆえに、もはや、この御子イエスさまのゆえに、この世界において、わたしたちの人生において、神さまのご栄光が輝かないところは、どこにもありません。どん底のような苦しみのところにも。絶望の果てのようなところにも。死の淵にも。そして、墓の中までも。イエスさまは来てくださり、その救いの光で、隅々まで照らして下さいました。

そして、イエスさまの御業は、十字架の苦しみと死を通して、復活へと至り、この方が、すべての勝利者、すべての支配者、まことの王であり、すべての神の栄光を持つ方であることが、明らかにされたのです。

ここにいるわたしたちは、一人一人、この、イエスさまの光に捉えられ、照らされ、救われたのです。今や、わたしたちの上に、神さまの御心は成ったのです。

イエスさまによって罪を覆われたわたしたちは、国と力と栄えをすべてお持ちの神さまの御前に、罪を赦された者として、立つことが許されています。

そして、その圧倒的なご栄光を、御力を、ご支配を、目の前に見つめて、この方を「わたしの父なる神よ」「父よ」と親しく呼び、祈り、賛美することが許されています。

わたしたちが、神さまの栄光をたたえること。神さまにのみ、栄光を帰すこと。

それは、神さまの救いの御業が、確かにわたしたちの上に実現し、わたしたちの罪が赦され、わたしたちが神さまのものとされている。その恵みの現実によるものなのです。

このようにされたわたしたちが、神さまをほめたたえずにいられるでしょうか。

心から、賛美が溢れ出さずにいられるでしょうか。

わたしたちは、このような国と力と栄えに満ちた、天の父なる神さまのものなのです。十字架と復活によって救い出してくださった、御子イエスさまのものなのです。まことの信仰へと導き、恵みを受け取らせてくださった、聖霊なる神さまのものなのです。

わたしたちは、はじめから、今も、そして終わりの日まで、すっかり、この神さまのものなのです。

今日のローマの信徒への手紙6：36にはこうありました。

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」。わたしたちもまた、神さまから出て、神さまによって保たれ、神さまに向かっていきます。ですから、神さまの栄光をほめたたえます。

「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン」、「国と、力と、栄光は、永遠にあなたのものです。アーメン」。神さまにのみ栄光があると信じ、告白し、賛美できることは、わたしたちが救われているということ、そのものなのです。そしてそれが、わたしたちが存在している目的であり、わたしたちの、最も幸いな状態なのです。

<祈りの実現>

さて、「主の祈り」は「ねがわくばみ名をあがめさせたまえ」という願いから始まりました。そして、最後には、「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」との賛美、告白に至ります。

そうであるならば、「主の祈り」における、わたしたちの願いは、終わりの賛美に至る時に、もうそこで実現している、ということになるのではないのでしょうか。

「主の祈り」を心から祈る度に、わたしたちは、その願いの実現に与る。祈る度に、神さまの御力によって、確かに神さまに近づけられる。祈る度に、神さまのご支配の力が、さらにわたしたちを強く捉える。そうして、祈る度に、わたしたちは、神さまのみ名をあがめ、ほめたたえる者とされるのです。

そして、これはまさに、わたしたちのささげる礼拝と、同じ構造なのです。

み名をあがめさせたまえ。そう祈りはじめ、最後には、栄光をたたえる賛美に至る。

礼拝の初めの讃美歌は、必ず、三位一体の神さまをほめたたえる讃美歌から始まります。

そして、わたしたちは罪を告白し、赦しの宣言をいただき、神さまの御言葉によって、新しい命の糧をいただきます。そして、感謝の応答として、信仰を告白し、神さまに自分をお献げするしるしに、献金を献げる。

そして、最後には、声を合わせて、神さまのご栄光をほめたたえる賛美を歌います。

礼拝は、神さまのご支配の下、神さまの御力によって、神さまの御心が成るところです。イエスさまの十字架と復活が示され、わたしたちを救いに与らせ、わたしたちの信仰が養われるところです。礼拝には、御言葉を通して、三位一体の神さまのご臨在があり、そのご栄光の満ちる中で、神の子とされたわたしたちは、神さまと親しく交わり、生きた対話をし、また新たな命に満たされるのです。

こうして、わたしたちは礼拝を通して、神さまの栄光から、栄光へと至る。賛美から、賛美へと至る。すべての恵みを与えてくださる神さまに、すべての栄光を帰すのです。

初代教会の時代から、このような礼拝の中で、ずっと唱えられ続けてきた「主の祈り」です。そこに教会が、信仰者たちが、神の子どもたちが、最後に「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」と加えたのは、思えば、当然のことであり、自然なことであったと言えるでしょう。

すべての祈りもまた、神さまのご臨在があり、交わりがあり、対話があり、わたしたちを、神さまの栄光へ、賛美へと至らせるのです。

ですから、これまでの教会の信仰を受け継ぎ、「主の祈り」を受け継いだわたしたちもまた、礼拝において、また祈りにおいて、すべての教会の神の子たちと声を合わせて、神さまのご栄光をほめたたえていきたいのです。

「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」。

主の日の礼拝で恵みを受けて、日々の生活の中に送り出されていくとき。わたしたちは、その日々の中にあっても、世の戦いの中にあっても、課題や困難の中にあっても、自分の罪や、弱さや、この世の暗闇を見つめながら日々を歩むのではなく。イエスさまにあって、「主の祈り」を祈ることによって、共にいてくださる神さまのご支配と、愛の御力と、わたしたちを照らし、導いてくださる、大いなる栄光を仰いで、歩いていくことが出来るのです。

その中でこそ、わたしたちは、神さまが「わたしたちの王、またすべてのことに力ある方として、すべての良きものをわたしたちに与えようと欲し、またそれがおできになる」との信仰をますます強められ、ますます神さまを愛し、ますます神さまに依り頼み、ますます神さまのみ名を賛美する者とされていくのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

国と力と栄えとが、永遠にあなたのものであること。そして、わたしたちが永遠に、そのようなあなたのものとされていることを、心から感謝いたします。

わたしたちが、イエスさまによって罪から救われ、聖霊によって恵みを注がれ、あなたのみ名を賛美し、栄光をほめたたえる者とされていることを、心から感謝いたします。

ただあなたの聖なる御名が、永遠に賛美されますように。すべてのものが、共に、声を合わせて、あなたを賛美しますように。

わたしたちの救い主イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン

【讃美歌】 37 「いと高き神に」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン